Short Note (短 報)

日本で最初に飼育されたペンギンに関する追加記録

福田 道雄¹

Additional Notes on the First Captive Penguins in Japan

Michio Fukuda¹

Abstract. The first importation of live penguins to Japan took place when two Humboldt Penguins (*Spheniscus humboldti*) arrived in 1915 from Chile. One of them was donated to the Tokyo Imperial Household Museum Zoo (which later became Ueno Zoological Gardens) on June 9, 1915 by Mr. Isokichi Ozawa, the chief engineer of a Japanese merchant ship with regular service to South America. After its death it was preserved as a stuffed specimen, and its record was found in the specimen database (*Tensanbu Daicho*) of the Tokyo Imperial Household Museum. After the passing of this penguin, the other individual was purchased by Hanayashiki, an amusement park in the Asakusa district in Tokyo. In 1951, Mr. Haruo Takashima discovered the record for a specimen of the Humboldt Penguin registered by the same specimen number in the *Tensanbu Daicho* at the National Museum of Nature and Science; he later reported that it was an immature bird (Takashima 1952a). It is now believed that the specimen of the immature Humboldt Penguin at the National Museum of Nature and Science, previously considered to be of unknown origin, was one of those first two living penguins imported into the country. In addition, I found that the penguin illustrated in a traditional Japanese hanging scroll was modeled after the individual kept at Hanayashiki and that it was also an immature bird. This has led this author to assume that immature penguins that were easy to keep, were chosen for shipment to Japan.

Key words: First captive penguin, Hanayashiki, Humboldt Penguin, National Museum of Nature and Science, Tokyo Imperial Household Museum.

キーワード: 初飼育のペンギン, 花屋敷, フンボルトペンギン, 国立科学博物館, 東京帝室博物館.

はじめに

初めて日本に渡来したペンギンは、『禽譜』に書かれた「ピングイン」(栗本 1826, 記名は澹州栗瑞見であったが, 堀田・鈴木 (2006) に従って栗本瑞見とした。栗本丹州と呼ばれる場合も多い) によれば, 江戸時代享保年間 (1716~1736) に蛮船 (磯野 (2007) は「恐らく蘭船」と記

Received 9 October 2018, Accepted 17 December 2018.

¹ ペンギン飼育史研究会, 〒302-0005 茨城県取手市東5-4-58. E-mail: mogufuku@beige.ocn.ne.jp.

¹ Study Group of Captive Penguin History, 5-4-58 Higashi, Toride, Ibaraki 302-0005, Japan. E-mail: mogufuku@beige.ocn.ne.jp.

doi.org/10.3312/jyio.51.53

載) が持って来たキングペンギン *Aptenodytes patagonicus* 全剥皮で作られた肖像(剥製)とされている(川端 2001; 磯野 2007)。次いで、1821(文政4)年に上記の『禽譜』の中で堀田(1831a, b)は、オランダ人船長が長崎奉行にペンギンの皮で作った小袋を贈ったと記載、描かれた皮の図から種名はキングペンギンと判明した。その他に、『鳥獣図』(南齋 発行年不明)にフンボルトペンギン *Spheniscus humboldti* の剥製を詳細に写生した図があった。このフンボルトペンギン剥製の渡来時期は不明であったが、同じ卷子に描かれた他の動物図に付けられた注記に、その動物が1837(天保8)年渡来と書かれていたので、1837年以前に渡来したと思われる。

その後の明治・大正時代になると、複数種の標本が東京帝室博物館に寄贈され、また科学教材機器会社などが剥製販売の広告を出し始めた(高島 1952b)。特に、1911~1912年の白瀬南極探検隊が3種約40個体のペンギンを捕獲し(多田 1912; 島 1930)、そのうちの3種19体以上の仮剥製を持ち帰った(福田 未発表)ことで、ペンギンの渡来数は急増したとみられる。

一方、生きたペンギンが日本に初めて渡来した記録は1915(大正4)年の6月9日で、宮内省東京帝室博物館附属動物園(現在の上野動物園、以下は動物園と略す)に、南米航路貨客船であった東洋汽船紀洋丸の機関長小澤磯吉がチリのイキケから持ち帰ったフンボルトペンギン1個体(以下、動物園個体と略す)を寄贈した時のものである(福田 2013)。この個体は9日後の18日に死亡した。ところが、都新聞(1915年6月22日刊)に「十八日に上野動物園で死んだペンギン鳥の兄弟のペンギンが廿日浅草の花屋敷に来た。このペンギンは紀洋丸の機関長が僅った二羽持って来たので、小さい方を動物園へ寄附し、大きい方を花屋敷の方へ賣ったもの」と書かれていて、これによって日本へ持ち帰られたのは2個体であったと判明した。花屋敷の購入した個体(以下、花屋敷個体と略す)については、当時の新聞記事か花屋敷の作成した看板、チラシ、新聞広告以外の資料は見つからず、その後の生死も不明であった(福田 2013)。今回、両個体に関する新しい記録や資料が見つかったので、報告したい。

方 法

東京帝室博物館附属動物園は、1882(明治15)年に開園した農商務省天産部博物館附属動物園が1886(明治19)年に天産部博物館と共に宮内省へ移管された博物館附属動物園であった。その後の明治22年大日本帝国憲法発布で博物館が帝国博物館、さらに明治33年に東京帝室博物館と改称されたが、附属動物園として存続した。ところが、動物園個体来園の前年1914(大正3)年の官制改正で、動物園は天産部から会計課に所属替えとなった(佐々木 1975; 東京都恩賜上野動物園 1982)。しかし、東京都恩賜上野動物園(1982)には「死亡した飼育動物のうち重要なものは、剥製標本になって、天産部(課)に置かれた」との記載があった。そこで、東京帝室博物館の標本に関する資料と、東京帝室博物館の廃止後に多くの鳥類標本を引き継いだ国立科学博物館(小林・加藤 2017)のペンギン剥製標本(以下、すでに標本と表記された部分を反復記載する場合を除き、剥製と略す)に関する資料を調べた。また同時に、ペンギンを購入した時期以降の花屋敷のペンギンに関する資料も捜した。

結果および論議

現在の上野動物園に残された記録や資料では、動物園個体の種名以外の特徴や死後の処理などを記載したものは見つけられなかった。しかし、所属元であった東京帝室博物館の「動物録

大正四年」に保管された大正四年七月七日付け決裁の文書に、動物園個体の死体が「天産課ニ於イテ入用ニ付同課へ引継」と記載されていて、上記の東京都恩賜上野動物園(1982)の記載が裏付けられた。そして、東京帝室博物館天産部の鳥類標本台帳である「天産部台帳」(小林・加藤(2017)で表記された名称に従った)が国立科学博物館に保管されていて、その天産部台帳の中に「番號 A4939 フンボルトペンギン(雌) *Spheniscus humboldti* Meyen <Humboldt Penguin> 價格 500円 大正四年十二月本館製作[元動物園飼養]」と記載があった。記載時期は動物園個体の死亡から5ヵ月以上経過していたが、大正4年に動物園で飼育したフンボルトペンギンは1個体だけだったので(福田 2013)、この剥製は初めて飼育された個体に間違いのないと思われる。

戦後の1951(昭和26)年になり、日本に保管されているペンギン剥製を精力的に捜していた山階鳥類研究所の高島春雄が、国立科学博物館の倉庫にフンボルトペンギンの剥製1体が保管されていることを確認し、「未成鳥(標本番号A4939)」と報告していた(高島 1952a)。ところで、高島春雄の他の報告(高島 1951, 1952b; 高島・山田 1953など)ではペンギン剥製を見つけた場合に、詳しくその由来などを記載していたにも関わらず、このフンボルトペンギン剥製については上記以外の記載がなかった。従って、この時期すでに国立科学博物館では、これが東京帝室博物館由来の剥製であると、すぐにはわからない状態になっていた可能性もあったと思われる。しかしながら、この標本番号が天産部台帳の標本番号と一致したことから、この剥製が日本で最初に飼育されたペンギンであり、さらに高島春雄の記載から動物園個体が幼鳥と判明した。

このようにこの剥製の所蔵場所が移動した経緯は、「上野動物園百年史」(東京都恩賜上野動物園 1982)の解説を要約すると次の通りである。「帝室博物館の所属する博物局が農商務省から宮内省に移管された時から、すでに天産部の扱いが問題になっていたが、1923年の関東大震災の被災で、天産部列品の処理が急務となった。湯島に文部省が設立した教育博物館から改称した東京博物館があって、ここが震災から再建されると、大正13年から14年にかけて天産部列品の譲渡を受けた(一部の重複資料は学習院、植物関係資料は東京帝国大学附属植物園に再譲与)。その後、東京博物館は上野公園内に移転し、昭和6年に東京科学博物館と改称し、現在の国立科学博物館となった」となる。国立科学博物館では、標本類の収蔵場所が何度か変わったことなどで、この剥製の標本ラベルが引き継がれず、標本番号A4939の剥製の所在がわからなくなっていた。しかし、今回筆者が閲覧したところ、現在の収蔵場所である国立科学博物館筑波研究施設自然史標本棟6階鳥類収蔵庫には、来歴不明で古い時期から所蔵されているフンボルトペンギンの剥製は1体だけで、しかもそれが幼鳥であった。このことから、図1に示した剥製は動物園個体で、初飼育のフンボルトペンギンである可能性が非常に高いと思われる。

この剥製には、国立科学博物館の所蔵する他のペンギン剥製と異なる大きな特徴があった。それは、剥製を固定した台全体が雪原を模したように白く塗装され、粗目状に大粒の白い砂が敷き詰められていたことと、台に剥製を固定した位置が長方形の台の辺に対して正面向きではなく、斜め向きになっていたことである(図1)。その後、これと同じ特徴のある剥製の写った写真が見つかった。その写真は1920(大正9)年10月に撮影された東京国立博物館研究情報アーカイブズ画像(画像番号PCDBD-0001280, 付図1)で、4種4体のペンギンの剥製が写っていた。そのうちの前列2体の剥製に同じ特徴があり、剥製の台の角に記入された記号と数字

図1. 日本で最初に飼育されたペンギンと見られる剥製（国立科学博物館所蔵）。

Fig. 1. The specimen considered to be the first penguin in captivity in Japan (National Museum of Nature and Science collection).

の一部が判読できたことから、天産部台帳に記載されている標本番号A4796（左側）及びA4798（右側）と個体が判明した。即ち、天産部台帳の中のペンギンとして最初に記載された標本で、共に1911（明治44）年に寄贈されたジェンツーペンギン *Pygoscellis papua*（天産部台帳ではペンクインの一種 *Megadyptes antipodes* Hombron & Jacquinot 〈Yellow-crowned Penguin〉とキガシラペンギンの学名と英名が誤って書かれていた）と、フンボルトペンギン（天産部台帳ではペンクインの一種）であった。また、この写真撮影と同年発行の館内ガイドブックであった「東京帝室博物館列品案内目録（脊椎動物之部）」（東京帝室博物館 1920）には、ペンギン目の項で「インペロルペンギン（A4901），アデリイペンギン（A4903），エロークラウンドペイグイン（A4796），フンボルトペンギン（A4798）」と4種の和名と標本番号が列記されていて（合わせて記載された学名と産地の転記は省略），陳列場所は「三號館階上第十六函」と表示されていた。そのため、この写真は当時の東京帝室博物館のペンギン剥製陳列場を撮影したものかもしれない。なお、後列2体の剥製は形状や剥製の台の特徴から、前列2体に続いて1913（大正2）年に白瀬南極探検隊後援会が台付きの剥製に仕上げて寄贈したエンペラーペンギン *A. forsteri* とアデリーペンギン *P. adeliae*（天産部台帳ではそれぞれインペロルペンギン（A4901）とアデリイペンギンで、アデリーペンギンは寄贈数2体（A4902とA4903）のうちの1体と推定でき、上記の列品案内目録の列記内容と一致すると思われる。

写真撮影時の1920年10月までに天産部台帳に記載されたペンギンの中で、この写真に写っ

ていない剥製は、同種2体を所蔵していたアデリーペンギン1体を除くと、今回調査対象とした初飼育のフンボルトペンギン(A4939)だけであった。なお、動物園にはこの撮影時までさらに4個体のフンボルトペンギンが2個体ずつ2度寄贈され、そのうちの少なくとも3個体が死亡していたが(福田 2013)、天産部台帳に記載はなかった。以上のことから、付図1の前列2体の剥製が来歴不明の剥製と同じ特徴を持っていて、A4939の初飼育ペンギンは東京帝室博物館製作と明記されていたので、これら3体の剥製は東京帝室博物館が明治末から大正初期までの古い時代に製作(少なくとも剥製の台は製作)されたと考えられる。そして、現在国立科学博物館に所蔵されている来歴不明のフンボルトペンギン剥製は、1951年に確認された標本番号A4939の剥製と同一である可能性がさらに高まったと考えられる。

ところで、付図1に写ったフンボルトペンギン剥製は羽装から幼鳥と判別でき、天産部台帳には「番號 A4798 ペンクインの一種 *Spheniscus humboldti* Meyen 〈Jackass penguin〉 産地 南米智利國イキケ 價格 1600円 四十四年十一月小澤磯吉寄贈」(英名は誤っていた)と記載されていた。当時、日本と南米との間の移動手段は海路しかなく、南米西海岸は東洋汽船の専用航路であったので(中野 1931)、東洋汽船紀洋丸機関長の小澤磯吉と同姓同名の人が同時期に同じ場所でペンギンを入手して、日本に持ち帰る可能性はほとんどなく、この標本の寄贈者は紀洋丸機関長の小澤磯吉と同一人物と考えられる。さらに、前記のように標本は東京帝室博物館製作の剥製であったので、仮剥製(あるいは死体)の状態で作られたとみられる。最初は生きた状態のペンギンを持ち帰ろうとしたが、帰路の航海途中で死亡し、そのまま寄贈した可能性も皆無とは言えない。この個体しか入手できなかった場合もあるが、標本でフンボルトペンギンを寄贈するのが目的ならば、通常は種を識別しやすい、胸部に馬蹄形の黒帯がある成鳥を選ぶのではないと思われる。実際に、前記の『鳥獣図』の剥製、小澤磯吉の寄贈後に見つかった1925年に購入された武蔵高等学校中学校所蔵の剥製(高田・白井 2016)と1936年発行「博物学標本目録」(山越工作所 1936)に掲載された剥製写真も、すべて成鳥であった。

一方、花屋敷個体は動物園へのペンギン寄贈から11日後に、花屋敷がペンギンを購入した記録に現れるが、日本到着からそれまでの間の状態は不明であった(福田 2013)。今回、この花屋敷個体についても新しい資料が見つかった。それは、このペンギンを描いた掛け軸(図2)があったことである。明治・大正時代には教育現場で教育掛図が広く使われていて、その中にキングペンギンを外国書籍図版から模写した掛図が残されていた(上田ほか 2015)。しかし、花屋敷で飼育されていたペンギンを描いた掛け軸には、描いた時期、図柄(絵)の説明、画家名を表した「大正乙卯夏七月東都浅草花屋敷飼養南極ペンゲイン鳥 木槿庵笛畝官書」と添え書きがあって、教育掛図とは性格の異なるものとみられる。大正乙卯とは大正四年の年号を十二支表示したもので、木槿庵は西沢笛畝の雅号であった。添え書き末尾の「官書」とは何か公的に依頼されて作成されたものかもしれないが、詳細は不明だった。

掛け軸作成者の西沢笛畝は大正・昭和時代の日本画家・人形工芸家で、1889(明治22)年の浅草生まれであった。花屋敷がペンギンを購入する2年前の大正2年に日本画家荒木寛畝の塾に入門し、多数の花鳥画を残していた(斎藤 1987)。そして、掛け軸にはペンギンを描いた時期を7月と記入していたが、「酷暑益々健康 ペンギン鳥 浅草公園花屋敷」と書かれた新聞広告(都新聞1915年7月16日刊)が見つかり、少なくとも7月16日頃までは生存していたとみられる。さらに、詳細に描かれた掛け軸の絵によって、花屋敷個体もまた幼鳥と判別できた。

図2. 1915年に花屋敷で飼われたペンギンを描いた掛け軸（山下 徹氏所蔵，上下2枚に分けて撮られた写真を合成・加工した）。

Fig. 2. The hanging picture scroll depicting a penguin kept in Hanayashiki, an amusement park in Tokyo, in 1915 (Collection of Mr. Tohru Yamashita. Composite photograph from upper and lower parts of the illustration).

以上の新たに見つかった記録などから、小澤磯吉が持ち帰ったフンボルトペンギン2個体（1911年に寄贈した個体も含めれば3個体）とも幼鳥であったと判明した。そして、全個体の「産地」はチリのイキケと記載されていた。『南洋渡航案内』（東洋汽船株式会社 1913）には、イキケはチリ北部の要港で、硝石など各種鉱石の積出港と書かれ、東洋汽船南米航路寄港地の1つであった。そのため、ペンギンを入手したか、積み込んだ港の地名が「産地」として記されたと思われる。チリではフンボルトペンギンのコロニーは海岸線に沿って点在していて（Araya & Todd 1987）、いずれかの近在のコロニーで捕獲されたとみられる。フンボルトペ

ンギンは、グアノ層などの地面に掘った穴や岩の下の隙間などを使って繁殖する (Battistini & Paredes 1999)。コロニーでは危険を察知するとその巣穴に逃げ込むことが多いため、成鳥も巣立ち前後の幼鳥もどちらも同時に捕獲できるはずである。ところで、本種の幼鳥は成鳥に比べて、捕獲後の強制給餌による餌付けがより容易で、さらに日本に着くまでの長い航海中のあまり良くない環境に似た条件下でも、成鳥よりも飼いやすい (福田 未発表)。

1912~1917年に南アメリカの海鳥類の調査をしたMurphy (1936) は、隣国のペルーでフンボルトペンギンがペットとして飼われているのを何度も見たと記載していた。また時期は少し後になるが、チリのイキケから1937年11月15日に東京市恩賜上野動物園に寄贈されたフンボルトペンギン10個体について、読売新聞 (1937年11月16日夕刊) にはペンギンについて「同地在留邦人に飼はれるようになり同船に託されて来朝するようになったもの」と書かれていた。恐らく、当時の現地でフンボルトペンギンを飼うことは珍しくなく、餌付けて飼い慣らす場合の幼鳥と成鳥の齢による違いが知られていたのではないと思われる。そこで、生きた状態で日本まで持ち帰るため、それを事前に聞いて幼鳥を選び、入手したのかもしれない。なお、イキケから横浜までの航海日数について、前報 (福田 2013) では、1926年に東洋汽船から南米西海岸航路営業権を引き継いだ日本郵船の1932年運行表から52日と書いた。しかし、その後に見つかった1912 (大正1) 年の資料 (東洋汽船株式会社 1912) によれば、当時の東洋汽船は桑港 (サンフランシスコ) 経由で横浜からカイヤオ (ペルーのカヤオ) まで65日以上で、イキケはさらに1,000 km以上南に位置していて (パナマからカイヤオが約10日なので、カイヤオからイキケはその半分の5日と想定すると)、70日以上を要するとみられ、想像以上に長い期間であった。最後に、動物関係とは異なる分野と思われる貨客船機関長の小澤磯吉が少なくとも2度も、チリからペンギンを持ち帰ったことには何か理由があったのではないと思われるので、今後もこれらに関する資料を発掘し、より詳しい経緯を明らかにしたい。

謝 辞

東京帝室博物館天産部の鳥類標本台帳が残っていて、その中にペンギンの標本が記載されていることを山階鳥類研究所の小林さやか氏に教えていただき、このことが本稿執筆のきっかけの一つとなった。また、同氏に東京国立博物館研究情報アーカイブズのペンギン剥製写真の前列に写った2体の天産部台帳標本番号を教えていただいた。国立科学博物館に所蔵されている東京帝室博物館天産部台帳とフンボルトペンギン剥製の閲覧と撮影に際しては、同館の西海功氏に便宜を図っていただいた。花屋敷のペンギンを描いた掛け軸は、掛け軸の上半分と下半分を別々に撮った写真を、合成して本稿に掲載することを所有者の山下 徹氏が許可して下さった。小原喜美子氏に東京帝室博物館動物録の文書と花屋敷個体の掛け軸の添え書きの解読を、川田 健氏に英文を校閲していただいた。さらに、担当編集委員遠藤秀紀氏と2名の匿名査読者には多数の有益な助言と御指導をいただいた。合わせて、深く感謝を申し上げる。なお、付図1は東京国立博物館のデジタルコンテンツ無償利用条件に合致することから掲載させていただいた。

引用文献

Araya MB & Todd FS (1987) Status of the Humboldt Penguin in Chile following the 1982–83 El Nino. In: *Proceedings*

- of the Jean Delacour/IFCB Symposium. Los Angeles, Calif. 1987: 148-157 (Republished in Spheniscid Penguin Newsletter 1: 8-10).*
- Battistini G & Paredes R (1999) Nesting habits and nest characteristics of Humboldt Penguins at Punta San Juan, Perú. *Penguin Cons* 12: 12-19.
- 福田道雄 (2013) 日本の戦前のペンギン飼育. *動物園研究* (20): 48-59.
- 堀田正敦 (1831a) ヘンゲイン, 『禽譜』(堀田正敦編著). 東京国立博物館研究情報アーカイブズ. 博物図譜データベース https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002070723ZF, 画像番号H0018460-H0018462. 参照2018-10-1.
- 堀田正敦 (1831b) ソイドゼーハウゴル. 『禽譜』(堀田正敦編著). 東京国立博物館研究情報アーカイブズ. 博物図譜データベース https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002070723ZF, 画像番号H0018460, H0018461. 参照2018-10-1.
- 堀田正敦・鈴木道雄 (編著) (2006) 江戸鳥類大図鑑: よみがえる江戸鳥学の精華「観文禽譜」. 平凡社, 東京.
- 磯野直秀 (2007) 明治前動物渡来年表. 慶應義塾大学日吉紀要. *自然科学* (41): 35-66.
- 川端裕人 (2001) ペンギン, 日本人と出会う. 文藝春秋社, 東京.
- 小林さやか・加藤 克 (2017) 明治・大正期に収集された国立博物館の鳥類標本コレクションの検証—山階鳥類研究所所蔵の帝室博物館旧蔵鳥類標本の歴史的背景とその評価—. *タクサ* 43: 42-61.
- 栗本瑞見 (1826) ビンゲイン. 『禽譜』(堀田正敦編著). 東京国立博物館研究情報アーカイブズ. 博物図譜データベース https://webarchives.tnm.jp/infolib/meta_pub/G0000002070723ZF, 画像番号H0018459. 参照2018-10-1.
- Murphy RC (1936) *Oceanic birds of South America, Vol. I*. The American Museum of Natural History, New York.
- 中野秀雄 (編) (1931) 東洋汽船六十四年の歩み (2017年復刻. 社史で見る日本経済史 93. ゆまに書房, 東京).
- 南齋一笑 (発行年不明) 『鳥獣図』. 東京国立博物館マイクロフィルム, 資料番号と10749.
- 斎藤良輔 (1987) 西沢笛畝. 相賀徹夫 (編) 日本大百科全集 17: 717. 小学館, 東京.
- 佐々木時雄 (1975) 動物園の歴史—日本における動物園の成立. 西田書店, 京都.
- 島 義武 (1930) 南極探検と皇大神宮の奉斎. 思想善導図書刊行会, 東京.
- 多田恵一 (1912) 南極土産 片吟鳥の話. 春陽堂, 東京.
- 高田 陽・白井亮久 (2016) 武蔵高中標本庫の鳥類剥製標本 —1920年代の採集標本に基づく鳥類の Fauna Musashinensis の作成—. *武蔵高等学校中学校紀要* 1: 45-76.
- 高島春雄 (1951) 上野動物園に到来のヒゲペンギン. *採集と飼育* 13: 275-278.
- 高島春雄 (1952a) ペンギン行脚. *採集と飼育* 14: 327-329.
- 高島春雄 (1952b) ペンギン行脚II. *山階鳥研報* 1: 33-35.
- 高島春雄・山田致知 (1953) 日本関係ペンギン資料. *鳥* 13(63): 99-108.
- 東京帝室博物館 (1920) 東京帝室博物館列品案内目録 (脊椎動物之部). 東京帝室博物館, 東京.
- 東京都恩賜上野動物園 (1982) 上野動物園百年史. 第一法規, 東京.
- 東洋汽船株式会社 (編) (1912) 南米渡航案内. 東洋汽船株式会社, 東京.
- 東洋汽船株式会社 (編) (1913) 東洋汽船株式会社南米航路案内. 東洋汽船営業部, 東京.
- 上田啓未・堀井美里・堀井 洋・古畑 徹 (2015) 「企鵝図」は Lacépède のペンギンか? 水野掛図・動物学掛図を中心に. *金沢大学資料館紀要* 10: 11-25.
- 山越工作所 (1936) 博物学標本目録. 山越工作所, 東京.

付図1. 1920年に撮影されたペンギンの剥製写真（東京国立博物館研究情報アーカイブズ，画像番号PCDBD-0001280.）参照2018年10月1日.

Appendix 1. A stuffed specimen of a penguin, photo taken in 1920 (Tokyo National Museum Digital Research Archives, No. PCDBD-0001280.) Accessed on 1 October 2018.